

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文)) 1.				
(著書(和文)) 1. 茨城の幼稚園教育 （第31号）開かれた 信頼される幼稚園を 目指して - 学校評価 の実践 - 2. 市スタートカリキュ ラム 3. 市アプローチ・ス タートカリキュラム （平成29年3月） 4. 市アプローチ・ス タートカリキュラム （事例追加版）	共著 共著 共著 共著	2006年3月 2012年3月 2017年3月 2018年3月	茨城県教育委員会 市教育委員会 市教育委員会 市教育委員会	本研究は、小学校1学年担任教師における幼児教育を意識した教育実践の在り方を検討するため、自己評価と、保護者による外部評価を実施した。小学校教師が、児童の気持ちに寄り添った教育活動を意識することによって、保護者の不安が就学前より軽減することが分かった。一方、保護者の学習面に対する「不安」は増加しているため、学習のつまづきに対する情報を学年便りなどで提供する。 P. 70～P. 73担当（「小学校生活にスムーズに適応するための教師の関わり」について） 宗次直巳（計15名） 公立幼稚園教諭と小学校教諭が、接続期（1月～5月）の「生活する力」における「安全」の観点について、円滑な接続となるように、カリキュラムを作成した。接続期の子供たちが、どのような経験をしているのか、また両教諭が、どのように指導を工夫しているのかを話し合い、具体的に示している。 P. 6担当（生活する力 安全について） 宗次直巳（計9名） 公立と民間の幼児教育施設の保育者と小学校教諭が、接続期（1月～5月）の「生活する力」における「生活のリズム」の観点について、円滑な接続となるようにカリキュラムを見直し改善した。 P. 3担当（執筆担当部分：生活する力生活のリズムについて） 宗次直巳（計15名） 公立と民間の幼児教育施設の保育者と小学校教諭が、接続期（1月～5月）の「関わる力」における「規範意識」の観点について、円滑な接続となるようにカリキュラムの見直しと改善を行い、さらに「事例」を追加した。幼児教育施設では、図書室において、幼児が約束やきまりを守って生活しようとするための援助のポイントを示した。また、小学校では、児童の入学前の経験を大切に、学校図書館の活用を通して、児童が公共の場でマナーを守って行動することの指導のポイントを示した。 P. 15～P. 16担当（公共の場でマナーを守って行動するー図書館へ出発！ーについて） 宗次直巳（計32名）

<p>5. アプローチ・スタートカリキュラムリーフレット（平成30年度版）</p>	<p>共著</p>	<p>2019年3月</p>	<p>市教育委員会</p>	<p>幼児教育担当指導主事として、幼児教育施設教職員20名と小学校教員12名に指導助言し、鹿嶋市アプローチ・スタートカリキュラムリーフレットの編集と本リーフレットの趣旨説明を加えた。本リーフレットの作成の目的は、幼児教育施設と小学校と家庭との連携によって、子供たちの円滑な接続がより推進できることである。そのため、これまでの接続カリキュラムに「家庭教育の視点」を加えた。本リーフレットは、就学時健康診断で、市内全ての5歳児の保護者に配付している（約560名）。 A3版表面担当（表紙とリーフレットの説明について） 宗次 直巳（計37名）</p>
<p>6. 平成30年度就学前教育・家庭教育推進のための市町村モデル事業実</p>	<p>共著</p>	<p>2020年3月</p>	<p>茨城県教育委員会</p>	<p>本事業は、A市の幼児教育の推進体制の構築と保幼小接続カリキュラム及び家庭教育支援資料の効果的な活用方法に係る実践をまとめたものである。5歳児が12月の頃に、幼児教育施設教職員と小学校教員が幼児期の終わりまでに育ってほしい姿から園児の実態を把握しカリキュラムを検討した。また、自園の教育課程と接続カリキュラムを基に指導案等を作成し、保育実践をまとめたものである。 P. 21～P. 31担当（A市の成果報告について） 宗次直巳（計5名）</p>
<p>7. 茨城の幼児教育 第48号 架け橋期における保育・教育の質の向上—幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりにして—</p>	<p>共著</p>	<p>2023年3月</p>	<p>茨城県教育委員会</p>	<p>「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして、架け橋期における保育・教育の質の向上を図るためにはどのような実践をしたらよいかを探った。園と小学校が、それぞれの時期にふさわしい保育・教育を実践することにより、資質・能力は育まれていった。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、子供の育ちを捉え、子供理解に努め、保育・授業の振り返りをしながら、保育・教育の質が高まっていた。保育者と小学校教師が話し合う場を設けたことは、保育・教育の見直しができたり見通しがもてたりして、保育・教育の質の向上に効果的だった。 P. 13担当（Ⅱ 幼保小の架け橋期における保育・教育の質の向上 実践事例解説）宗次直巳（計8名）</p>
<p>(学術論文(欧文)) 1.</p>				

(学術論文(和文)) 1. 幼稚園から小学校への移行に関する研究 - 教師の視点を通して -	単著	2003年3月	茨城大学大学院修士課程	本研究では、「小一問題」は、幼稚園教諭と小学校教諭の子供を捉える視点に差異があるからではないかという問題をもち、幼稚園教諭143名、小学校教員199名に対して調査した。また、視点に差異がある要因をイラショナルビリーフと関連させて検討した。(77ページ)
(紀要論文) 1.				
(辞書・翻訳書等) 1.				
(報告書・会報等) 1.				
(国際学会発表) 1.				
(国内学会発表) 1.				
(演奏会・展覧会等) 1.				
(招待講演・基調講演) 1.				
(受賞(学術賞等)) 1.				